

---

**S A S**

洗濯バサミ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

S A S

### 【Nコード】

N 3 3 4 5 V

### 【作者名】

洗濯バサミ

### 【あらすじ】

ある特殊な学校に通う学生達のお話。近々テストがあるのだが、あるトラブルが発生して・・・！？

シリアスも織り交ぜつつ、面白くしていければと思っています。

## プロローグ（前書き）

はじめまして、洗濯バサミと申すものです。

えーっと、実はこの話、友人と共同制作で作っています。

友人が人物の名前などの原案を書き、わたしが文を書いております。

お暇でしたら、読んでやってください。

## プロローグ

カチツ・・カチツ・・カチン

秒針が「12」を指すのと同時に、むくりと布団から起き上がる。時計が「6:00」を示していることを確認すると、彼女は満足気に微笑した。

手早く朝食を済ませ、寮から学校への道を一人で歩いて行く。その姿は凛として強く、そして美しかった。

彼女の名は天野 あまの 才花 さいか。どちらかと言えば小柄で童顔。かわいい顔をしている。鳥の濡れ羽のようにつややかで美しい黒髪は、すつきりとしたショートボブ。黒曜石のような瞳は力強く前を見据えている。

そんな彼女の背後に、一人の男が音も無く現れる。どうやら友達のように、才花は笑顔で振り向いた。

「おはよう。殺翁」

「・・・おはよう」

他人が聞いたら怒っているのかと不安になるような、不機嫌な声で短く答える。

彼の名は暗野 あんの 殺翁 さいおう。背は高くないが低くはなく、細身で身軽そうな身体をしている。地味だが端正な顔をした彼の表情はピクリとも動かない。まるで顔の筋肉が凍り付いてしまったかのようだ。下手に整っているのに、怖さが倍増している。髪の毛は才花と同じ鳥の濡れ羽色で、少し短めにカットされている。瞳は才花よりも、深い、深い黒。どこまでも吸い込まれてしまいそうな、闇のような黒。

二人は何をしゃべるでもなく、ただ黙って歩いている。そこに気まずさはなく、むしろ穏やかな空気が流れている。

その穏やかな空気をぶち破るように、遠くからすごい勢いで走ってくる足音が二つ。音の主が分かったふたりは、どちらともなしに足を止め、振り向いた。

「はぁ・・・懲りないね、陽牙も」

「・・・」

殺翁も無言で同意を示した。

「止まれこのクソ野郎！今日こそ木っ端微塵にして、二度と拝めないような顔にしてやる！！」

「きゃー！こっわーい」

鬼のような形相で、爆弾片手に男を追いかけている彼女の名は、火<sup>か</sup>神<sup>がみ</sup>。蘭<sup>らん</sup>。フード付きのダッパしたコートを着ているため、体系は分かりづらいが、中肉中背。髪は染めたかのように鮮やか茶色。瞳は髪より濃いこげ茶。目立たないが結構美人である。

「気色悪い声だすな！この女つタラシ！！」

「えー心外だなあ。俺ほど女の子を大切にする奴はいないよ？」

逃げながら笑顔で答えるこのチャラそうな男の名は、朝宮<sup>あさみや</sup> 陽牙<sup>ようが</sup>。今は茶色く染めてある長めの髪は、先々週までは金髪だった。蘭と同じ色をした切れ長の瞳は、見るものを魅了する。すっと通った鼻筋にシャープな顎のライン。間違はなくイケメンである。背が高く細身だが、無駄のないしなやかな筋肉を持っており、身軽で持久力もありそうだ。

さらに激しいバトルを繰り広げそうになっている二人を、いや蘭を、才花がなだめる。

「まあまあ、蘭。そんなに怒らないの」

「そおそ。あんまり怒ると身体に悪いよ」

「なっ！誰のせいで怒ってると思っ」

「はい、ストップ！陽牙は余計なこと言わない」

また攻撃をはじめそうになった蘭を止め、陽牙を叱りつける。殺翁は黙ってそれを見ていた。我関せず、という感じである。

「今日は何やらかしたのさ、陽牙？」

「えゝ何にもしてないよ？ただちよゝつと協力してもらっただけ」

そう言っていたずらっぽく笑う陽牙。どうも機嫌がいいみたい。蘭はすごく機嫌が悪いみたいだけど。

ふたりに詳しい話を聞いたが、陽牙が蘭をからかったり話をまぜつかえしたりして長くなったので、要約するとこんな感じ。

朝、陽牙に女の子が告白してきた。それを断ったところ、「付き合いってるひとがいるんですか？誰なんですか？」と問い詰められ、困っていたところに蘭がちょうど歩いてきた。「この子が俺の彼女。だから・・・ごめんね？」陽牙はそう言って蘭の肩を抱き寄せた。女の子が去っていった後に、固まっていた蘭が正気に戻り、さっきの状態に至る、というわけらしい。

「まったく・・・何やってるのよ、陽牙」

そんなことしたら怒るに決まってるのに・・・。私がこれ見よがしにため息を吐くと、陽牙は悪びれた様子もなく肩をすくめた。

「俺ちゃんと謝ったよ？」

「あれは謝ったうちに入らない！」

蘭は納得していないらしい。まあ悪いのは十中八九陽牙だろうし。しょうがない、奥の手を出すか……。陽牙近づいて行って、耳元に小声で一言。

「……好きな子ほどいじめちゃうってわけ？」

途端に陽牙の顔が真っ赤になった。相変わらず見掛けによらずピュアね。チャラくって女ぐせ悪そうなのに、実は本命には告白もできないなんて。

くそっ、お前後で覚えとけよ、と陽牙が小さく毒づいた。

「……ごめんなさい」

「……許す」

軽く涙目になりながら、じとつとわたしを睨んでくる陽牙。蘭はとても満足そうだ。

「これで一件落着くと。さあ、学校行くよ」

まだぶつぶつ言ってる不機嫌そうな陽牙と、ご機嫌になった蘭を連れて歩き出す。その後ろを殺翁が黙って付いてくる。いつもと同じ、平和な朝だ。

なんだかんだで、何事もなく一日が過ぎ去った。平和すぎて怖いくらいね。

いつもの習慣でメールボックスを確認すると、メールが届いていた。珍しく学校からだ。なんだろうと思ってみると、もうすぐテストがあるとの通知だった。

「ああ、もうそんな時期だっけ。・・・また面倒なのが来るのね」

ああ・・・憂鬱。テストよりもあいつらの方が面倒くさいわ・・・。  
なんて考えながら、ふとパソコンに目をやると、もう一通メールが  
届いていることに気付いた。誰からだろう？

「・・・陽牙？」

なんで陽牙から？不思議に思いながらメールを開くと“お前絶対覚えとけよ”と言。

まだ朝のこと根に持つてるの？そんなに気にしなくても蘭は絶対気付かないのに・・・。

五秒くらい経ったところで、パソコンの画面に爆弾が現れた。機械音が鳴り響く。

「10...9...8...」

「甘いね。こんなので私には勝てないわよ」

ま、陽牙も分かったのことだろうけど。ふふつ、と楽しみに笑い、素早く爆弾をクリックしてキーボードで解除コードを打ち込んでいく。

「今回は結構レベル高かったかな？」

セキュリティにも引つかからなかったし・・・。無事解除し終わって満足気に呟くと、返信ボタンを押して、少し考える。

「このぐらいかな」



カタカタと打ち込んでパソコンを閉じた。大きく伸びをして、電気を消してからベッドに潜り込む。ふふつ、そろそろ見たかな、陽牙。いい気味。にやりと笑い、才花は静かに眠りに落ちた。一方その頃、男子寮のある一室で断末魔のような悲鳴があがったとか。

-  
-

From: 才花

件名: RE:

本文: 80点。なかなかやるわね。

あと、明日食堂に集合ってみんなに伝えといて。

P.S. 添付ファイル見てね。

才花

“添付ファイル有”

-  
-

## プロローグ（後書き）

なんか長くなってしまった気が……。すみません。  
読む気うせるよとか思った方もいますよね（笑

ここまで読んでいただいた方、ありがとうございました。

## 第一話

次の日、食堂に集合した私たち四人は、窓際の一番奥まったテーブルに座って、各自思い思いの飲み物を手にしていた。この食堂で、一番目立たないテーブルを選んだというのに、周りからの無遠慮な視線がぐさぐさと突き刺さってくる。何人もの生徒が私たちを見ながら何事が話している。まあ・・・おかたテストのことだろうけど。

「な〜にしてくれちゃってるのかな。さ・い・か・ちゃん？」

陽牙が張り付いたような笑顔で話しかけてくる。わたしも笑顔で応戦。

「どうかした？陽牙くん」

「しらばつけないでよ？どうしてくれんのさ。俺のパソコンのデータが全部、グロい死体写真に摩

り替わってるんだけど？壁紙も心霊写真になってるし、どうやっても全然変えれないし」

「それなら大丈夫よ。一週間経てば自然に戻るから」

「どこら辺が大丈夫なのかな？一週間これで過ごせと？俺がこの手のやつ苦手なの知っててのやってるの？ねえ」

ふふっ、た〜のしい。思ったとおりの反応だわ。

「当たり前じゃないの。陽牙のために、すっごく怖くてグロい写真を選び抜いたんだから。大変だったわ〜。普通のサイトじゃちよつとレベルが低かったから、警察のデータベースにもハッキングした

の」

「なあに才能の無駄遣いしてんの？嫌がらせにそこまで手をかけないでくれない？」

「大丈夫よ。前から作ってあった、いつか使おうと思ってたウィルスだから、全然大変じゃなかったわ。だから心配しないで」

につこりと笑いかける私とは対照的に、陽牙は苦虫を噛み潰したような顔をしている。

「心配なんてしてないからね。問題はそこじゃないしさ」

私がうつきうきで言い返そうとしたところで、蘭が止めに入った。

「いいかげんにしろよ、ふたりとも！わざわざ集まったのになにやってんだ」

「・・・・・・・・」

殺翁も呆れた目で見ている。殺翁って何考えてるのか分かりにくいけど、しばらく一緒に居れば、なんとなく分かるようになる。殺翁の無表情は笑顔で本心を隠す奴よりもよっぽど分かりやすい。慣れたら、むしろ駄々漏れかもね。

「で？結局何の話だっけ？」

陽牙は諦めたようにため息を吐いた。

「そうそう、陽牙をからかうのが楽しすぎて忘れてたわ」  
「おいっ！」

また文句を言いかけた陽牙の口を、蘭が後ろから手を回して塞ぐ。

「黙れ」

「!!!!!!・・・むっっ」

急な接近に驚いたのかちよつと赤くなっている陽牙。幸い後ろに回っている蘭に陽牙の顔は見えないけど。蘭の手を剥がそうとしながら、離してくれ、と目で訴えている。

うん。とりあえず放置の方向で。

「・・・・・・・・」

殺翁は黙って話を聞いている。どうでもいいけど、驚くほど自己主張が少ないわね。いや、・・・仕事のときには便利だし必要だと思っただけだね。

## 第一話（後書き）

今回は短めでしょうか・・・？いや、長い・・・？  
基準がわからなくなってきました（笑）

## 第二話

「昨日メールがあっただけで、13日にテストがあるって」

やっと手を離して貰えた陽牙が、なるほど、というように頷く。

「だから朝から騒がしかったんだね」

「・・・・・・・・」

殺翁も、相変わらずの無表情で同意を示し、蘭も納得したように頷く。

「はぁ・・・・・・・・」

そして示し合わせたかのように全員がため息を吐いた。何事にも無関心なあの殺翁ですら。

「またあいつら来るのかぁ・・・・・・・・」

「・・・・・・・・来るでしょうね」

ふっと投げやりに笑い、遠い目をする陽牙。わたしも似たような目をしてるのだろうけど。

「ああ〜考えただけでうざい」

「・・・・・・・・」

フードの上から頭を掻きむしる蘭。殺翁も顔をしかめている。いつも無表情で感情を表に出さないあの殺翁ですら。

わたしたちが何をそんなに嫌がっているのかというと・・・

「よお。しばらくだなあ、天使さん方」

決して友好的とは言えない雰囲気をかもし出しながら、五人組の男女が近づいて来た。いいタイミングでご登場ね。

このうざそうな五人組はいつもテストで三位の「海賊船（パイレーツシップ」。

私たちと「AS」（チームについては後ほど説明するよ）に負け続けてるチームよ。そんな三流チームの人物紹介とかいらなっ・・・」

「おいっ！黙って聞いてりや言いたい放題か！三流とかいうな、三流とか！言っとくけどなあ！お前ら「天使」と「AS」が強すぎるだけだからな！！」

確かに「海賊船」は決して弱いチームじゃない。むしろ他のチームに比べれば飛びぬけてレベルが高い。だけど・・・私たち「天使」や「AS」には敵わないってわけ。だから一応その実力は認めてる。絶対言ってあげないけど。

「えっ口に出てた？気付かなかった」

これ厭味じゃなくて本当なんだけど・・・信じないだろうなあ。

案の定つかかってくるし・・・。

「嘔吐けえ！絶対わざとだろ！？」

それにしてもなんでずつと怒鳴るみたいな音量でしゃべるのかな・・・うるさいよ。しかもリーダー以外しゃべってないし。まあ他のメンバーも似たようなことしか言わないから別にいいんだけど・・・



。「で？何か用？」

分かりきったことだけど、一応聞いておく。

ふふんつと勝ち誇ったかのような顔をして（それもメンバー全員がそろって同じ顔をしていた）、リーダーはこう言い放った。

「今回こそは一位になってやるからな！」

「ねえリーダーそれって負けるやつ言うセリフよ」

やっぱり・・・と思いながら突っ込みを入れておく。負けフラグ立ってるよ。

リーダーは、うぐつ、と言葉に詰まり、一瞬怯んだようだったがすぐに言い返してきた。

「う、うるさいうるさい！！いいか、見てろよ！お前らあとで絶対泣きを見るからなあ！覚悟しとけよ！！」

「海賊船」のリーダーはこちらをビシッと指差して子供っぽく喚き散らし、チームのメンバーを連れて去っていった。

「はあ・・・やっと思ってくれたわ」

「今回はいつもより短かったなあ」

「あゝもう！相変わらずうざりたい！テストの度に突っかかってきやがって・・・」

「・・・」

はあ・・・一気に疲れた。今日は授業ないからまだいいけど・・・。

「あつ。才花、テストのプリントちょうだい」

陽牙に言われて思い出した。今日集まったのはその為だったのに「パイレーツシップ海賊船」の登場ですっかり忘れてた。

「ああ、そうだったわね。すっかりしてたわ」

全員にプリントを配り終わり、詳細はメールする、と告げてとりあえず解散にした。

「……………」

すると、殺翁の姿が音もなく掻き消えた。

陽牙が、ひゅうつ、と口笛を吹き、しかしいして驚いた様子もなく呟いた。

「相変わらずやるね」

てっきり自分もそのまま去っていくと思ったら、くるりと振り向いて、すっかり油断していた蘭のおでこに軽くキスをした。

「っ！」

目に見えて不意を衝かれている様子の蘭。その顔を確認したあと、満足気に笑いくると向こう向いて、手を振りながら、じゃあね、と鼻歌まじりに去っていく陽牙。

蘭が怒るよ、絶対。分かってやるんだから、しょうがない奴だわ。……というか、自分でキスしたりするのは平気なくせに、なんで人に言われるとあんなに照れるのかな……？

この前の朝のことを思い出しながら、変なの・・・と呟いたところで、シヨックで固まっていた蘭がハッと正気に戻った。そして案の定怒りが沸いてきたようで、硬く握り締めた拳がぶるぶると震えている。ぎりつ、と、歯軋りとは思えないような音量で、しかし紛れもない歯軋りの音が聞こえてきた。怒りが尋常じゃないみたいね。

「あいつ・・・！ふっざけんなぁ！！今度こそ息の根とめてやる！！！」

どこから出したのか手榴弾を両手に持ち、去って行った陽牙を追いかけるべく、食堂から走り去っていく。私はというと、至って普通に荷物をまとめ、席を立った。殺翁や陽牙たちのように派手な演出はしない。さすがに殺翁のようなことはできないし、なるべく目立ちたくない。とゆうか、「頭脳科」のわたしは本来裏方だよ。・・・だいたい気付いていると思うけど、私たちは普通の学生じゃない。通っているのも普通の学校じゃない。

ここは、日本一を誇る「暗殺者育成学校」。私たちは正真正銘「暗殺者」である。

～到達度テスト～

試

験日 3月13日

### 【試験内容】

指定された人物の暗殺または捕獲。

ターゲットなどの詳細は、のちにチームのリーダーのP  
Cに送られる。

## 【注意事項】

- 1 ターゲットの居場所などの情報は自分たちで集めること。学校側は一切の協力をしない。
- 2 他のチームへの妨害、情報操作、裏工作を認める。ただし、学校外の一般人に迷惑のかかることはしてはならない。（例：インターネット上の情報を書き換える。

など

- 3 任務に失敗したチームには、「特別補習授業」への強制参加が課せられる。
- 4 任務に失敗したチームは直ちに学校側に連絡すること。連絡しなかったチームには、  
「特別補習授業」プラス一ヶ月の外出禁止、二ヶ月間全校舎の掃除が課せられる。

理事長

瑠緋戸るひと 菖蒲あやめ

## 第二話（後書き）

長い・・・！今回は長かったです。

あれ？なんか・・・長さのことしか言っていない様な・・・？

読んでいただいた方、ありがとうございました。

これから、お暇でしたらお願いします。

### 第三話

「暗殺者」といつてもプロじゃないから、そう名乗るには少し語弊があるかもしれないけど。ここ、わたしたちの通う学校「ききょう学園」が、所謂「暗殺者育成学校」であることが秘密なのは言うまでもないだろう。表向きは「超」がつくような「エリート学校」。その所為もあるが「ききょう学園」の入学試験は、難易度の高さが半端じゃない。その上実技もあるため、頭がよければ入れるというわけでもない。頭脳も身体能力も人並み以上、ともに推薦がもらえらるくらいのレベルが求められる。そして入学後に「頭脳科」と「実技科」に分かれるわけだ。わたしは前にもいったとおり「頭脳科」。殺翁や陽牙、蘭たちは「実技科」。基本、ひとつのチームに「頭脳科」はひとり。作戦を立てる際に問題が生じるからだ。方向性が違ったりして、ね。

歩きながら、みんなにも配ったテストのプリントをぼんやりと眺める。ふと・・・訳もなく、なんの前触れもなく、昔のことを思い出した。この学園に入ったときのことを。入るきっかけになったときのことを・・・。

気が付くと寮にある自分の部屋の前に来ていた。相当ぼんやりしていたらしい。今でもはつきりしない意識のなか、習慣で鍵を開けて部屋に入る。ひさびさに昔のことを思い出したからだろう・・・何故いまごろになっていきなり思い出してしまったんだろうか。ふかふかのソファに座り込みながら、記憶をたぐり寄せて原因を探してみる。が・・・それらしいことは、きっかけになるようなことは全くなかったように思う。否、きっかけなんて要らないのかもしれない。まだ、心のなかに、奥深くに、残っていたのではないだろうか。完全に消し去ったはずのあの忌まわしい“記憶”が。消し去っ

たつもりでいた、あの、“記憶”とも呼べないような、わたしの身体に刷り込まれて消えない、あの“悪夢”が。

「もう・・・乗り越えたと・・・思ってたんだけど、な」

あのときのことがフラッシュバックして、走馬灯のように頭の中を駆け巡る。一度始まってしまったらもう止まらない。“記憶”の渦に飲み込まれる。それに逆らう術を、わたしは持たない。世界が闇に包まれる。ああ・・・まだ。始まってしまふ。もう何度見たか分からないような、あの・・・。

「・・・いか、さいか・・・才花!!」

わたしを呼ぶ声に、現実に取り戻された。世界に光が戻っていく。どうやら、無意識のうちに目を閉じていたらしい。

「殺翁・・・?どうして・・・」

どうしてここに・・・?と、わたしを連れ戻してくれた声の主、殺翁に向けて尋ねたが、いつもの無口なやつに戻っている。でも、わたしの両方の頬にあてられた殺翁の手はとても暖かいし、瞳はいつもと変わらない闇のような黒。そのことが、わたしを安心させる。わたしは現実にいるのだと実感できる。少しの間そのぬくもりを堪能していると殺翁の二つの手がずっと離れた。そしてそのままわたしの隣に座ると、おもむろに口を開いた。

「・・・様子がおかしかった」

もしかしてこれは「どうしてここに・・・?」に対しての答えだろうか。相変わらずだなあ。思わず笑ってしまう。

「ふふっ・・・そんなにおかしかった？」  
「・・・・・・・・」

無言で頷く殺翁。この感じからすると、蘭と陽牙にもばれてるんだろうな。

「バレバレってわけね・・・。敵わないなあ、みんなには」

少し自嘲気味に笑うと、殺翁がぼそつと呟いた。殺翁がはつきりしゃべることなんて滅多にないけど。

「・・・何年一緒にいると思っている」

いつも仮面のような無表情を貼り付けた殺翁の顔に、少し得意気な微笑が浮かんだ。それは本当に短い間のことだったし、微笑というには少し控えめ過ぎるものだったが、確かに殺翁は微笑んだ。それはとても暖かい、才花を思いやる気持ちに満ちた微笑だった。そんな殺翁の笑顔を見て才花は、やっぱり、と呟いた。

「敵わないなあ・・・本当に」  
「・・・・・・・・・・・？」

微かに首を傾げた殺翁に向かってゆっくりと首を振る。くすつと笑みを漏らすと、ますます訳が分からないという顔をする殺翁。その、どこことなく子供っぽいあどけない表情がなんだかとても可愛く見えて、知らず知らずの内に笑顔になる。

「ありがとう、殺翁」  
「・・・・・・・・」



まだ訳が分からないという顔をしていたが、しっかりと頷く殺翁を見て、安心したように、はにかむように、少しくすぐったそうな顔で、才花は微笑んだ。

そのとき才花の部屋の前にはふたつの人影が。どうやら喧嘩がひと段落ついたらしい蘭と陽牙である。

「どうやら解決したみたいだね」

部屋から時折聞こえてくる才花の笑い声を聞きながら、安堵したように呟く陽牙。

「おう。さすが殺翁だな！」

「んじゃ、俺たちは退散しますか」

「うん。じゃーなー、殺翁」

陽牙達の存在には確実に気付いているであろう、部屋の中の殺翁に向かってあいさつをし、ふたりで肩を並べて歩いてく陽牙と蘭。なんだかんだいって仲のいいコンビである。

### 第三話（後書き）

自分のタイトルをつけるセンスの無さに気付き・・・諦めました  
誰かセンスを与えて欲しいですね・・・いろいろと。

## 第四話

次の日、私たちはまた、昨日集まった食堂のテーブルに来ていた。あるトラブルが発生したのだ。

「もうすぐしたら「AS」も来ると思うから」

紅茶を飲みながらみんなに声をかける。どうでもいいが、わたしの好みの紅茶は「ダーズリン」である。ストレートティー向きのダーズリンは、透明度の高い琥珀色をいており、世界最高と称される独特の香りや好ましい刺激的な渋みが癖になる・・・らしい。これは友人からの受け売りなため、実際よく分からない。細かいことは抜きにして、ただ単に味が好きただけだ。

「それはいいけど、俺トラブルのこと詳しく聞いてないんだけど？」

「あ、あたしも」

「・・・・・・」

陽牙はカフェオレ、蘭はオレンジジュースを、殺翁はコーヒーをブラックで飲みながらそれぞれ反応を見せる。

「ああ、それは「AS」が来てから説明を・・・ん、ちょうど来たわね」

食堂の入り口に目をやる蘭と陽牙。殺翁は分かっていたのだろう、振り向きもせず静かにコーヒーを飲んでいる。

颯爽と歩いてくる「AS」の面々。混んでいて進みにくいはずの食堂を楽々と進んでいる。別にすごい力を使ったとかではなく、周りの生徒が遠巻きにして道をあけているからである。ちなみにこの現象はわたしたち「天使」でも起こる。目立つのはあまり好きではないが、便利なことは確かだし言っても逆効果な気がするので何も言わない。

「やつほ、天使」一行」

黒髪なのにも関わらず、陽牙に負けず劣らずチャラく見える。彼の名前は桜野<sup>おうの</sup>春貴<sup>はるき</sup>。瞳は薄めの茶色で、陽牙と同じくらいの長さの髪から時折見える、羽根を模した銀色のピアスが特徴的である。軽薄そうな表情を浮かべたその顔は、日本人にしては彫りが深くはつきりとした顔立ちで、陽牙とはタイプの違うイケメンだ。「AS」の暗殺を担当している。暗殺の腕は殺翁とほぼ互角だが感情面で多少左右されてしまうのがたまにキズ。

そして何故かやたらとわたしに絡んでくるのよね……。

「才花ちゃん、今日も可愛いね」

へらへらと笑いながら話しかけてくる春貴。

「はいはい、どうもありがとう」

「うわ、てきとー。絶対本気にしてないでしょ」

適当に流されたことをたいして気にした様子もなく、またへらへらと笑う。いつものことながら意味が分からない。

「いちいち春貴の冗談になんて付き合ってらんないわよ」

「だから冗談じゃないって。本気だっけいつもってんじゃない」

「はいはい。いいかげんそのアホ面引っ込めて」

「ひどいなー、アホ面なんて。これでもかっこいいって人気なのに」

「わたしにはその魅力が全くもってわからないわ」

「そんな冷たい才花ちゃんも好きだよ」

いつものようなやりとりだが、相変わらずへらへら笑って楽しそうな春貴。心底意味が分からない。はっ、もしかして・・・

「春貴って・・・Mなの・・・？」

「いや、違うよ？なにその本気の目。失礼だなー、なんてこと言うんだ才花ちゃん」

「本当に・・・？」

「うわーやめて、その疑惑の目」

両目を手で覆い隠して嫌がる春貴。絶対演技だろうけど。

黙りこんだわたしに春貴がまた何か言おうとしたとき、さえぎるように、落ち着いた声がわたしたちをたしなめた。

## 第五話

「ほーら、ふたりとも本来の目的忘れてるでしょ。いいかげんにしなさい」

少し大人びた感じで仲裁に入った彼の名前は椿つばき 冬弥とうや。殺翁と同じ黒髪短髪に、知的な雰囲気、銀フレーム眼鏡がやけに似合う。性格も大人びているが顔も大人びていて、イケメンというよりはハンサムの部類だろう。「AS」のリーダー兼参謀を担当する天才ハッカーで、ハッキングの腕とIQはわたしと互角である。

冬弥に続き、わたしたちに向かって可愛い声かけられた。

「冬弥の言うとおりですわ」

お姫様の様な少し高慢な雰囲気を含んだ甘い声で、どこか怒ったように冬弥に賛同する彼女の名前は蘭姫らんき 秋奈あきな。整いすぎて人形めいた顔立ちに、フランス人である母親譲りの金髪が映える。中世ヨーロッパの様、とまではいかないが、フリルのふんだんに使われたボリユームのあるスカートが妙に似合っている。さらに髪型は所謂縦ロール。これもまた妙に似合っていて、存在自体が時代錯誤というか、ちよつと浮いている感じた。その持ち前の美貌をいかし、陽動・・・というか誘惑を担当している。これを本人に言うとかかなり怒られるけど。

「ごめんね、冬弥、秋奈」

「謝るくらいなら、最初からなさらないでいただけます?」

やはりまだ棘のあるセリフを聞きながらわたしは密かにため息を吐いた。普段は別に仲が悪いわけじゃないのに、春貴が関わると何故かやたらと突っかかってくる。

「ごめんな、秋奈」

顔の前に片手を出して申し訳なさそうに謝る春貴を見た途端、コロツと機嫌がよくなる秋奈。笑顔で返事をする。

「いいえ、反省してくださっているのなら、いいですわ」

少し頬を染めて嬉しそうに笑う秋奈はすごく可愛い。この態度を見れば秋奈の気持ちなんてすぐに分かりそうなものの、春貴は鈍いため全く気付かない。その所為でわたしにとばかりがきているのだ。でも、何故わたしのかは分からない。

他にも春貴仲のいい人はたくさんいるのに……。

わたしの思考を中断させるように、冬弥が手を叩いてみんなを静まらせた。

「みんな、これじゃあ何のために集まったの分からないでしょ。春貴はおとなしく座ってて、秋奈も。才花も悪い癖だよ、すぐに目的忘れて人をからかうのやめなさい」

冬夜に叱られて少ししゅんとなるわたしたち。というか、特にわたし。ほんと、冬弥の言う通り、悪い癖だわ。

「うつ、ごめんなさい。……じゃあ本題に入るわね。説明はわたしからでもいい？冬弥」

「ああ、いいよ。でも、夏美がまだだからちょっと待ってくれるか

な」

「分かったわ。でも・・・すぐに始められそうね」

「ああ、そのようだ」

すごい勢いで近づいてくる足音を聞きながらふたりで思わず苦笑する。

どうやったらあんなに大きな音を立てて歩けるのかな・・・？永遠の謎かもしれない。



## 第五話（後書き）

変なきり方で大変読みづらいかと思います・・・；；；

## 第六話

「ごめん、遅れた」

くだらないことを考えているうちに夏美ご到着。さすがに疲れたのか、少し息が切れている。

彼女の名前は桐崎<sup>きりさき</sup>夏美<sup>なつみ</sup>。背中の中ほどまである濃いブラウンの髪をヘアゴムで高めにくくり、前髪を黒いヘアピンで留めている。可愛い顔をしているが、さばさばした性格で自分の容姿には興味がないらしく地味な髪型をしている。しかし何故か、瞳に青いカラーコンタクトをつけており、本当は何色なのか知る者はいない。爆撃担当の夏美はいつもゆつたりとしたパーカー着ており、驚くほど多くの爆弾を隠し持っている。

「何やってたんだ？」

何気なしに声をかけた蘭。その声を聞いた瞬間夏美のテンションが明らかにあがった。

「蘭ねえさん！！遅れてごめんなさい。校内でナンパしてる不埒な輩がいたんで、ちよつと成敗してたんです！」

夏美は昔、男に襲われかけたことがある。そのときに夏美を助けたのが、ちょうど通りかかった蘭だった。それ以来ずっと蘭のことを姉のように慕っており、同じ年なのにも関わらず「蘭ねえさん」と呼んでいる。

別にそのことに関して何か言うつもりは無いが、そのなんともいえず某アニメを彷彿とさせる呼び名は・・・いいのかな・・・？

「相変わらず血の気が多いね、夏美は」

そこに陽牙が余計なちゃちゃを入れてきた。夏美は陽牙の姿を見た瞬間すごい形相で睨み付けた。

「ああ！？黙れこの俗物。気安く話しかけてくんない」

男に襲われかけて以来極度の男嫌いになってしまった夏美は、男である上に蘭に馴れ馴れしくする陽牙のことを毛嫌いしている。

会ったびにこんな態度をとられている陽牙は、夏美のそんな態度にはもう馴れっこだ。平気な顔で切り返そうとしたところで、邪魔が入った。

「・・・いいかげんしてくれるかな？」

邪魔をしたのは満面の笑みを浮かべた冬弥だ。顔は笑顔なのに目が全然笑ってない。そろそろかなとは思ってたけど・・・相変わらず怒った冬弥は恐ろしい。

その迫力にすでに気おされてしまい、黙り込んだ陽牙と夏美と蘭の三人。そんな三人に容赦なく説教を続ける冬弥。

「さっきから話全然進んでないの分かってるよね？なんのためにテスト前の貴重な時間割いて集まったと思ってるの？君らさあ、これ以上やったら・・・」

につこりとさわやかに笑う冬弥。沈黙と笑顔が逆に怖い。

三人がこくりと頷いたのを確認して、なんとなく見入ってしまったていたわたしに声をかける。

「じゃあ才花、説明を始めてくれるかな」

「え、ええ・・・」

笑顔で話す冬弥に、わたしも慌てて笑みを浮かべる。敵には回したくないな、絶対。

こほん、と少々わざとらしく咳払いをする。

「今回のテスト内容がターゲットの暗殺だったことは覚えてるわよね」

みんなが頷く中、陽牙授業中のように手を上げた。

「はい、さっそくだけど質問。俺たち、まだターゲットの情報全く与えられてないんですけど」

「・・・そのターゲットが問題なんだ」

冬弥がため息を吐いて呟いた。わけが分からないという顔をする陽牙。

「そう、今回のテストのターゲットなんだけどね・・・わたしたち「天使」のターゲットと「AS」のターゲット・・・同じなのよ」

わたしの放った言葉に呆然とするみんな。みんなの心を代弁するかのように、陽牙の口から気の抜けた声が零れ落ちた。

「・・・は？」

## 第七話

この学校のテストは、すべてチーム単位で行われる。さつきから出てくる「天使」・「AS」・「海賊船」などは、チームの名前又は略称である。入学時に必ず組まされるこのチームは、一度組んだら取り消すことはできないため、メンバーは慎重に選ばなければならない。

もう一度きちんとチームを紹介すると、わたしたちのチーム名は「天使」こと「天からの使者」。うん。このネーミングはわたしもどうかと思う。

わたし、天野才花はリーダー兼参謀担当。殺翁は普段の静けさからも分かるように、暗殺担当。陽牙は身軽さを生かして陽動担当。これも陽動のひとつだが、蘭は火炎・爆撃担当。

冬弥たちのチーム名は「AS」こと「All Season」。  
うん。こっちなんともいえないネーミング。

「AS」の担当は前にも言ったが、もう一度確認すると・・・冬弥はわたしと同じくリーダー兼参謀担当。春貴は普段の騒がしさに似合わず暗殺担当。秋奈はその美貌を生かして陽動・誘惑担当。夏美はやっぱり爆撃担当。

チームの説明はこれくらいにして、テストのことに話を戻すわね。まず、テストでは毎回、ひとつのチームに必ず一人ずつターゲットが指定される。しかし行う任務はさまざまで“ターゲットからある情報を手に入れる”や、“ターゲットの弱みを探る”などの情報関係のものや、今回のように暗殺関係のもの、“ターゲットにはれないように家具をひとつ盗んでくる”、“ターゲットのカツラをばれないように盗ってくる”などの目的が全くの分からないものまであ

る。

理事長はいつたい何を考えているのだろうか……。カツラに関しては完全な嫌がらせだろう。・・・まあ、それはさておき。

ここで重要なのは、“必ずひとチームにつき一人のターゲットが指定される”ということだ。これまでどんな常識破りな任務があるうとも、ターゲットが他のチームと被るなんて事は一度も無かった。それが今回のテストでは、わたしたち「天使」のターゲットと「AS」のターゲットが被ってしまったのだ。みんなが驚くのも無理はないだろう。

何故わたしが「AS」のターゲットを知っているのかというと、もちろん冬弥のパソコンをハッキングしたかである。冬弥もわたしのパソコンをハッキングして情報を得た。「どっちもハッキングするなら最初から教えあえばいいじゃないか」、と蘭に言われたことがあるが、楽しみとしてやっているのでもやめるつもりは無い。冬弥も同じだろう。

話が少し逸れてしまったが、そこでお互いのターゲットが同じだと知ったわたしと冬弥は、両チームのメンバーを今日集めることにしたのである。

驚いているみんなにもう一度、今度はもう少し詳しくトラブルについて説明するとようやく事態を飲み込んだらしい。まだ少し動揺の色を残しながらも、納得したように頷いた。

わたしはにつこり笑ってこう言った。

「では、行きましょう。・・・理事長室へ」

## 第七話（後書き）

な、なんか説明文ばかりになってしまったような・・・。  
相変わらず駄文ですみません

読んでくださった方、ありがとうございました。

## 第八話

ありえないほど広くて長い廊下を進み理事長室の前に立つと、そのタイミングを見計らったかのように中から声をかけられる。

「どうぞ、鍵は開いてるわ」

いやに艶のある声がそう告げた。

ピカピカに磨かれた金色のドアノブをひねって、フランス宮廷のように豪華な扉を開ける。

「そろそろ来る頃だと思っただわ」

部屋に足を踏み入れた瞬間、真正面のデスクに寄りかかるように立っている理事長に声をかけられる。わたしが言葉を発する間もなく、身振りでソファを進められた。それに従い、スプリングのよくきいた黒い革張りのソファに身を沈める。流石に八人は座れないので座ったのはわたしと冬弥だけ。冬弥が理事長の目を見据えて話を切り出した。

「僕らの言いたいことはもう分かっていますよね？」

「ええ・・・テストのことでしょう？」

にこりと妖艶に微笑みながら答える理事長に冬弥が頷く。

「ちょっと待っててね」

そう言ってデスクの方に歩いていく理事長。



理事長の名前は瑠緋戸るひと 菖蒲あやめ。少し段のついた、肩ほどもまでの茶髪はとても艶やかで、染めているとは到底思えない。きりつとした少しつり目気味の瞳は黒に近いグレイで、一度見たら忘れられないだろう。高い鼻梁に形のよい唇は見る者全てを魅了する。理事長はそんな美貌の持ち主だ。

少し・・・暇になったわね。

特にやることもなく、なんとなく手持ち無沙汰になってしまったので、デスクの引き出しを探っている理事長に声をかけてみる。

「今日は女性なんですね、理事長」

ふふつ、と理事長は笑い、何かを探す手は止めないまま答える。

「今日は女性になりたい気分だったのよ。どうかしら？」

答えなどとづくに分かっているだろう質問を、理事長はいつものようにしてきた。

「今日もとてもおきれいですよ」

本心から来る言葉だ。みんなもわたしの言葉に同意を示すように頷いている。

わたしの言葉を聞いて、嬉しそうに理事長がまた笑う。

「ありがとう。明日はどっちにしようかしら・・・あつ、あつたわ」

お目当てのものが見つかったのか、声をあげて引き出しから書類を出した。それを持ってこちらに歩いてきながら、またわたし達に

問いかけてくる。

「ねえ、あなた達はどっちがいいと思う？」

少し考えてから答える。

「わたしは個人的に男性の方がいいですね」

「僕も男性がいいです」

わたしと冬弥がそう答えると、みんなも何か言いたそうにしていたが、また混乱するだろうと分かっていたのか黙っている。

「あら、そうなの？・・・もしかして才花、好みなのかしら？」

わたしの顔、と、いきなり渋い男性の声で囁かれた。今は絶世の美女である理事長に、その渋くて魅力的な声はあまりにも似合わない。

「いえ、特にそういう訳では。ただ単に気分です」

全く動じないわたしにつまらなそうな顔をする理事長。次に冬弥にはなしを振った。

「面白くないわね・・・じゃあ冬弥はなぜ？」

「僕は理事長の変装の腕をもっと見たいんです。何か勉強になるかと思ひまして」

そう、わたしがさっき理事長の紹介をするとき、体格や性別に一切触れなかったのにはわけがある。

理事長は変装の達人なのだ。女性るときは、ほっそりとした手足

にふくよかな胸を持つスタイル抜群の美女。しかし男性のときは、細身ながらもバランスの取れた筋肉をもち男の色気を存分に醸し出すハンサムである。いくら変装とはいっても顔を変えることはできないはずなのだが、いつみても同じ人物とは思えない。体系も声も全く違うのだ。昔理由を聞いてみたことがあったが、「人の顔は化粧ですべてが変わるのよ」などと訳のわからないこと言っただけでかされてしまった。いくらなんでも化粧であそこまで変わると思えない。

理事長は昔、国際的に有名な暗殺者だった。言っておくが、あくまで「暗殺の世界で」有名だったのである。にもかかわらず、一度として同じ顔で人前に現れたことは無いと言われ、本当の性別がどちらなのかも知られていない。その理事長が若くして現役を退き、暗殺者育成学校を建てると決まったときは、ものすごい混乱が起ったという。それから理事長は、学校の理事長になるにあたって“生徒が混乱してはいけない”と思い、ある特定の男性と女性にしか変装しなくなったらしい。

確かに嬉しい配慮よね……。理事長の外見がそうコロコロ変わってちゃ困るわよ。

「そんなことより理事長、そろそろ本題にはいきりませんか」

冬弥が律儀に答えたあと、横道にそれた話の筋を戻した。

「ごめんなさいね、つい。……テストの件については、完全にこちらの手違いよ」

そういつて理事長はさっき取り出してきたふたつの書類を机に並べた。

わたしと冬弥はほぼ同時にその書類を手にとった。手に取りながら

わたしは思った。

手違いなわけがない。理事長はそんなミス、絶対にしない。

しかし今はそんなことを考えるときではないだろう。テストの方が先決だ。頭を切り替えて片方の書類を確認し、冬弥と交換する。はじめにみた書類には被っていたターゲットの名前と写真が。次に見た書類には別のターゲットの名前と写真が記されていた。他の項目は自分達で調べなければならぬため、まっさらである。

わたしが問いかけるように理事長を見ると、理事長は右の人差し指をピンと立てる。

「あなた達には、ある勝負をしてもらうわ。その勝負に勝った方が好きなターゲットを選べるの。どうかしら？」

理事長はまた、いつものように答えの決まった質問をしてきた。理事長がやると言えばやるのだ。わたしたちに拒否権などない。

まあ、断る理由もないし、断る気もないけど。

「もちろんやらせていただきます」

「僕も喜んで」

微笑むわたしと冬弥。背後でみんなが頷いているのを感じる。理事長は満足気に微笑んだ。

## 第八話（後書き）

理事長登場です

性別不明にしたのはわたしの好みですね

男か女か迷った挙句、一緒にしちゃえ、ってことで・・・（笑

それにしても今回冬弥と才花しかしゃべってない・・・

## 第八・五話

あのあと理事長室を去ったわたしたちは、明日に備えてすぐに解散ということになった。なんと理事長のいう“勝負”があるのは明日。いくらなんでも急すぎると思ったが、テストまであまり日がないので仕方がないのだろう。テストの延期は原則されないらしい。

まあ、いいハンデになるかもね。

なんて考えながら今日知った新しいターゲットの情報を集める。時間が無いので、情報は冬弥と協力して集めることになった。最初に知らされたターゲットは冬弥が。さっきも言ったが新しいターゲットはわたしが担当する。

いろいろなサーバをハッキングしながら渡り歩いていると、気になるデータを発見した。

「っ！！これは・・・」

早速冬弥にメールを送ろうと思ったとき、携帯の着信音が鳴った。

“ブーブーブー”

バイブレーションの振動が机に響き音を大きくする。今回のテストは楽しめそうな予感がしていた・・・。

## 第八・五話（後書き）

小説には全くもって関係ないんですが。

昨日学校でスカートのチャックが開いてるのを友達に言われて初めて気付くという事態がありました・・・。

わたしチャックが開いてたのとか初めてだったんですけど、あれってすごい恥ずかしいですね！

はい・・・どうでもいい話ですみません。

ここまで読んでくれた方ありがとうございます。

感想などいただけると嬉しいです。

## 第九話

今日はついに勝負の日。といっても昨日の今日なのであまり緊迫感はないのだが。

今わたしたちがいるのは多目的ルームといわれる場所で、その名のとおりかなりたくさんのことができる。バスケットやサッカーなどのスポーツをするスペースや、将棋やチェスなどのボードゲームをするスペース、拳銃の果てには演奏用の機材が完備されたスタジオや個人練習用の防音室、プールまである。

陽牙が感心したように周りを見渡す。

「相変わらず驚くほど広いよな」

「広すぎよ。絶対無駄なスペースがあると思うわ」

ため息をつくわたしにお構いなくうろつろとする陽牙。

「いい加減なれたら？もう一年半くらい使ってるじゃんか」

「そういう問題じゃないのよ。しかもここ滅多に使わないし」

陽牙はわたしの言葉に頷きながら、ガラス製のチェスの駒をひとつ持ち上げ興味深げに眺める。

「まあ、そうだけどね」

蘭が陽牙の持っているチェスの駒を奪い、窓からさす陽の光に当てながら楽しそうに言った。

「それにしても勝負ってなんだろうな！」



無邪気に笑う蘭を、陽牙が静かに見つめている。その眼差しがとても暖かいことに気が付くと、途端にいたずら心が顔を出した。そういうのはわたしのいないところでやって欲しいわね。からかいたくなる。

「さあ？理事長の考えることはよく分からないのよね・・・」  
「・・・・・・・・」

殺翁がこくりと頷く。そしてすつと入り口に視線を送る。と、その瞬間扉が少々乱暴に開け放たれた。

「おっはよー」

朝からハイテンションで現れたのは、見るまでもなく春貴率いる「AS」たちだ。  
いや、来るのは分かってたし他に来る人もいないから驚くことじゃないんだけど・・・いつもどおり期待を裏切らないその登場はどうなんだと突っ込みたくなる。

特に示し合わせた訳ではないが、自然と両チームの足は入り口正面にある特設ステージに向かっていた。そしてある程度の距離を置いて立ち止まったところに、マイクで拡張され少しノイズの混じった理事長の声が聞こえた。

「ごきげんよう、諸君。早速で悪いが、時間が無いんだ。始めさしてもらおうよ」

話しながら登場した理事長の声は、昨日理事長室で聞いた魅惑的で艶のあるいかにも女性的な声とは違い、耳障りがよく深い洪みのある男性的な声が才花達の鼓膜を振るわせた。どうやら昨日の宣言

どおり、今日は男にしたようだ。

もちろん理事長が手でワイヤレスのマイクを持つなどという優雅でないことをするはずもなく、スーツの襟元に取り付けた小型マイクを使っている。ステージ上のやや客席寄りに立っている理事長の後方には、光沢のある赤い布が掛けられた何かがある。下のほうから机の脚のようなものが少し見える。勝負に使われるものだろうか・

理事長はわたしたちの反応を待つわけでもなく、さっさと説明を始めた。

「今回の勝負では三つのゲームで戦ってもらい、先に二回勝ったほうが勝者となる。各ゲームのプレイヤーはすべてくじ引きで決めるが、くじを引くのは特定の一人のみとする。実に単純な勝負だろうか？」

少し首を傾げて言ったあと、わたしたちに向かって“後ろを向け”というように手を動かした。わたしたちが後ろを向くと、“ウィーン”という独特の機械音を発しながらスクリーンが下りてきた。

「ちなみに今回の勝負はすべて生放送中だ。特別に全校生徒を体育館に集め勝負の行方を見守ってもらっている」

理事長が言葉を切ると、スクリーンに観客達の映像が映し出された。ざわめきが聞こえるところを見ると、あちら側の音声も送られているようだ。

「何か質問はあるかな？」

ないことくらい分かっているだろうに、形式的に聞いてくる理事

長に向かって首を横に振りながらステージに向き直った。

そんなわたしたちを見て理事長は満足気に微笑み、執事が持ってきた黒いシルクハットを被った。そして大仰な仕草でお辞儀をした後、楽しそうに開始の合図を口にする。

「よろしい。では始めよう。ターゲットをかけた真剣勝負。・・・  
Let's start!」

背後のスクリーンから盛大な拍手が上がる。

ああ・・・面倒なことになりそう。

少し話し合った結果、わたしたちのくじを引くのは殺翁になった。すると、何故か対抗心むき出しの春貴が、ものすごい勢いで志願したので、「AS」のくじは春貴が引くことになった。

暗殺つながりで対抗してんのかな・・・？まあ、わたしに害は無いからいいんだけど。

「諸君、くじを引く者は決まったようだな。早速最初のゲームを始めよう」

わたしたちの話し合いが終わったことを確認した理事長は、ゲームの説明に入り始めた。

「最初のゲームは・・・」

いかにもといった風に間をあける理事長。

「・・・  
“ははぬき”だ」

## 第九話（後書き）

久々に（？）投稿です。

うーん、早く話を進めたいのになかなか進まない・・・。

感想などいただけると嬉しいです！

## 第十話

「・・・“ばばぬき”だ」

場に沈黙が流れた。執事を見ると、顔を背けており、心なしか肩が震えている。

「・・・・・・は？」

いやに緊迫感のない沈黙を破ったのは、春貴の、珍しく本気で驚いた声だった。春貴意外は声を発していなかったが、同じことを思っているのは明らかだ。

「“ばばぬき”だ」

わたしたちの反応から聞こえなかったと思ったのか、理事長はもう一度言い直した。

ていうか、なんでそんなに得意気な顔してるのか謎だ。どこに得意気要素があっただらうか・・・。

ここにいる誰もが聞いたかったことを、春貴が口に出した。

「あの・・・なんで“ばばぬき”なんですか・・・？」

初めて春貴を尊敬した気がするわ・・・。

春貴の質問に、そんなことも分からないのかい？とでも言いたげな顔をする理事長。

「仕方が無い、教えてあげよう。この“ばばぬき”のすばらしさを」  
いやいやいや、“ばばぬき”のすばらしさって……なんの話  
ですか。そんなのきいたこともないんですけど。しかも「仕方がない」  
とか言いながら、嬉しくて堪らない、って顔してるんですけど。

そして理事長がもったいぶって話し出した。まるですばらしい秘密を話そうとしてるかのよう。

「ばばぬき」がその単純な仕組みから、子供から大人まで遊べる簡単なゲームとして慣れ親しまれているのは知っているだろう。だがしかし、真の“ばばぬき”とはそんなに簡単なものではない。相手がどのカードを欲し、それがどこにあるのかを考え、そろつのを阻止するためには鋭い観察力や推理力が必要とされる。そして最後一対一になったときの緊張感。そこから究極の心理戦が始まるのだ。相手の顔をじっくりと観察し推理しカードを選ぶ。単純な仕組みだからこそ生まれる奥深さ、ああ！なんとすばらしいゲームだろう」

なんかそれっぽいこと言い出した……。

説明はそこで終わったかと思ったら、理事長がまた口を開こうとしている。それを、さっきからステージの隅で肩を震わせていた執事が、やんわりとたしなめた。自分が笑っていたことなどおくびにもださない。

プロだね……執事さん。

しかし正直言っただけだったことは事実である。まさか大真面目にしゃべっている理事長を前にして笑うわけにはいかないのだが、さっきから隣で口を押さえている蘭と陽牙がそろそろ限界だ。殺翁はいつもどおりの無表情。ちらつと「AS」の方を見ると、冬弥以外の全員が口に手を当て必死に笑いを堪えていた。スクリーンの向こ

うにいる観客達も十中八九笑いを堪えているだろう。

執事に止められて少し不満げな表情を浮かべていた理事長だが、渋々といった風にゲームの進行を再開する。

「では、最初のくじを引いてもらおう。殺翁、春貴、ステージにあらたまえ」

理事長のセリフとともに、ステージに箱がふたつ置かれた。それぞれ「天使」・「AS」と書かれている。

「はい」

「……」

ふたりは、理事長の言葉に頷いた次の瞬間ステージの上に立っていた。

そんなふたりを見ても全く驚いた様子などなく、むしろ当たり前のように話を進める理事長。

「……そういえばわたし、理事長が本気で驚いたところって見たこと無いわね。」

「不正を防ぐため、殺翁に「All Season」のくじを、春貴に「天からの使者」のくじを引いてもらう」

理事長の言葉に従い、それぞれの箱の前に立ち中に手を突っ込むふたり。そしてすぐに抜き出したその手には、名前の書かれているだろうボールが握られている。

そのボールを理事長が受け取り、読み上げた。

「始めのゲームのプレイヤーは、殺翁と秋奈だ。ふたりともステー



ジに」

なんとも言えない組み合わせだ。どっちが勝つとも言い切れない。殺翁は無表情で感情が読み取りにくい。秋奈は演技がうまい。わざと表情を変えて裏をかがれる可能性もある。少し、秋奈の方が優勢かもしれない。

殺翁は駆け引きとか苦手だしね……。どうなるのかしら。

春貴だけステージからおり、殺翁と秋奈は用意されていた机に向かいあわせに座る。そこに理事長が自らカードを配り、ふたりが余分なカードを削っていく。じゃんけんで順番を決め、すべて準備が整ったところで、理事長が静かに言う。

「一本勝負で勝敗を決する。では……。はじめ！」

## 第十話（後書き）

うーん、難しい・・・。

どうでもいい話パート2

「姉の名言」

姉「今日の帰りさー、”ねこぶんじゃった”しそつになっちゃった」

くだらなくてすみません・・・。

## 第十一話

「一本勝負で勝敗を決する。では・・・はじめ！」

先行である殺翁の手が動く。

まあ、そこからは普通に、“ばばぬき”。ふたりは黙々とカードを引き合い、時折そろったカードを真ん中に捨てる。程なくしてふたりの手札が合計で三枚になる。大袈裟に始まった割には地味な絵面だ。

わたしと冬弥の間で、呟きのような会話がされる。

「地味ね・・・」

「ああ、びっくりするほどに」

そしてその決着も、大袈裟なほどあっさりについてしまったのである。

ジョーカーが殺翁にわたって三回目のとき、秋奈が、ジョーカーではない方のカードを、引いた。

机の傍ですつと眺めていた理事長が判決を下す。これまたあっさりと。

「勝者、蘭姫秋奈」

ゲーム開始からたったの十分弱。展開が早すぎて正直ついていけない。観客は数秒間の沈黙の後、わっと歓声を上げた。嘆くような声も混じっていることから、おそらく賭けでもしていたのだろう。殺翁はふつとステージから消えたかと思うとわたしの隣におり、

秋奈は少し澄ました顔でステージから飛び降りた。もちろん今日も秋奈はドレス姿である。

あの格好で荒っぱいまねをするのはやめて欲しいところよね。隣で殺翁が重々しく口を開いた。

「……すまない」

どうやら負けたことに責任を感じているらしい。勝負の状況が流されているので、わたしたちに恥をかかせてしまったと思っているのだらう。いつもどおりの無表情だが、少し翳りが見えた。

「……気にしないでいいわ。まだふたつゲームがあるんだし」

急展開過ぎてついていけていなかった脳を動かし、そう言っただけでしたが、まだ気にしている様子の殺翁に蘭と陽牙も声を掛ける。

「そおそ。才花の言うとおりだよ」殺翁

「あたしが挽回してやるから安心しろ！」

ふたりの言葉と笑顔で、ようやくいつもの殺翁に戻った。

「……頼む」

少しほんわかした雰囲気 flowed。

「……これがもしゲームだったら“天からの使者の団結力が強くなった”とか出てきそうな雰囲気だわ……」

何か救いが欲しくなって逆隣を見ると、いつの間にか秋奈が立っていた。澄ました顔をしているが、嬉しさを隠しきれていない。

「何故わたくしが勝てたのか、教えてさしあげましょうか？」

うつ・・・確かにそれは気になってたのよね・・・。

いくら秋奈が駆け引き上手だとしても、あんなにあっさりと勝敗が決まるのは少し違和感があった。いくら殺翁が駆け引き下手だとしても、感情を表に出さないことくらいしただろう。

「・・・・・・・・・・・・・・・・ええ、聞きたいわ」

沈黙によつてささやかな抵抗を試みたがもちろん意味はなかった。悔しさを押し込めて頷く。

秋奈はわたしの反応に満足したように微笑んだ。

「先程、理事長がよく分からないことを語っていらしたでしょう？あのとときから勝負は始まっていましたのよ」

さり気なく失礼なことを言いながら理事長の方にチラッと視線を送る秋奈。

さっきの理事長の話していたこと・・・心理戦、だろうか・・・？

「つまり・・・演技で殺翁を誘導したってこと？」

ため息を吐いて首を横に振る秋奈。

「全然違いますわ。まったくもう、殺翁も才花も理事長の話当真を受けすぎですわ」

「真に受けすぎ・・・？心理戦じゃなかったの？」

「このゲーム、元から心理戦などというものは存在しなかったのですわ。最初から推理など必要なかったのです。今回のゲームは“ばぬき”。相手が欲しがっているカードなど、推理するまでもなく分かっていることですわ」

秋奈の言葉で気が付く。そうだ、今回のゲームは“ばばぬき”なのだ。必然的に相手の欲しがっているカードは決まってくる。

「……ジョーカー以外のカードだわ」

わたしの言葉に秋奈は満足気に頷いた。

「それが分かっていたれば簡単ですわ。ゲームの中で必ず一回はジョーカーが回ってくる。そのときに傷などの印をつけておけば、ジョーカーがどこにあるか一目瞭然ですわ」

「でもそれだと、相手に先に引かれてしまう可能性もあるわ」

「……わたくしが、手品が得意なのはご存知でしょう？」

知ってはいるが……今関係のあることだろうか。

「ええ、プロみたいに上手いわよね」

「わたくし、手手でカードを摩り替えていたのですわ。殺翁がジョーカー以外を引かないよう、カードに触れる瞬間に」

秋奈の手品の腕は知っている。それで食べていけるくらいの技量は持っているはずだ。しかし、殺翁ならそんな小細工すぐに気付くはずだ。

「でも、殺翁が気付かないのはおかしいわ」

不思議に思っただけで聞いたが、秋奈の一言で納得がいった。

「普段の殺翁なら、そうですわね。でも殺翁はこのゲームが心理戦だと思い込んでいたのでしょうか？そうになると、注意はわたくしの表

情に集中しますわ」

「手元に注意を向けなくなるのね・・・」

「そういうことですね。今回のゲーム、心理戦があつたとするならば理事長とわたしたちの間に、ですわ」

はあ・・・わたしは頭脳が取り柄だと思っていたんだけど、ちょっと自信無くすわね。

## 第十一話（後書き）

説明させるのって難しいですね

はい、私の文書力がないだけです・・・

感想などいただけると嬉しいです



## 第十二話

会話が途切れたちようどそのとき、観客がまた少し騒がしくなった。話している間に次の選手が決まったらしく、陽牙と夏美がステージに立っている。

腕を組み仁王立ちで陽牙睨んでいる夏美に対し、いつもどおりの胡散臭い笑顔を浮かべながら、陽牙は夏美を挑発するように話しかける。

「俺の対戦相手は夏美かくなるほどね」

「何か文句でも？」

「全然、むしろ大歓迎だよ」

「ほう、それは奇遇だな。あたしもお前を叩きのめすチャンスができて心底うれしいよ」

言ってる言葉とは裏腹に、睨み倒そうとするかのように陽牙にガンを飛ばしている。

「そのわりには血管浮いてるけどね」

「血のめぐりが良過ぎてなあ」

「血圧高いんじゃない？早死にするよ」

「お前が死ぬまでは意地でも死なないから安心しろ、くそ野郎」

「何それ愛の告白？きゃ」

「キモイ！どこをどう聞いたらそうなるんだアホ」

「あははっ、ほんと面白いよね」夏美。からかい甲斐があるって言うかさ」

「少し黙りなさい君達」

終わりの見えない喧嘩のような会話に呆れた理事長が、仲裁に入った。さすがに黙るふたり。

「次のゲームを始めようか。ふたつ目のゲームは“鬼ごっこ”だ」

まあね、なんとなく予想はついていただけでそういう系統のやつだよな。

「鬼は時間内に人間を捕まえれば勝ち、人間は時間まで逃げ切れれば勝ちとなる。制限時間は十分。鬼はじゃんけんで決めることとする」

今回は拍子抜けなほどあっさりとした説明だ。やはり“ばばぬき”での説明はわたしたちを騙すために意図的に行ったものなのだろう。

「じゃあ勝った方が人間ね。最初はグー、じゃんけん」

半ば強引にじゃんけんを始める陽牙。

「ポン！」

結果は、陽牙がチョキで夏美がパー。陽牙の勝ちだ。

「俺の勝ち！てことで夏美が鬼ね」

「うぐっ・・・仕方ないか」

悔しそうな夏美だが、こればかりはどうしようもないと分かっているのかおとなしく“鬼ごっこ”用のフィールドに移動する。

ふたりがスタート地点に立ったのを確認した理事長が、銃を持った左手を上げ、開始告げる。

「では、スタート！」

パンッ！

合図が鳴った瞬間陽牙が走り出し、そのあとを夏美が追う。足の速さは五分五分と言ったところだろうか。ふたりの距離は縮まることも広がることもなく、障害物が立ち並ぶフィールドを縦横無尽に駆けていく。

しかしゲーム開始から五分が経ったところ、ふたりに変化が現れた。全くと言っていいほど息を切らしていない陽牙に対し、わずかだが息が荒くなっている夏美。

さつきから敵だというのに夏美ばかり応援していた蘭が少し黙り、口を開いた。

「なんで夏美の方が疲れてんだ？同じ速さで同じ距離を走ってるはずだろ」

目にもとまらぬという言葉がしっくりくるようなスピードで走り続けているふたりを見ながら、不思議そうに首を傾げる蘭。

「もちろん基礎体力の差もあるけど・・・」

わたしのセリフを蘭が引き継ぐ。

「たかが5分で変わらないだろ」

そうなのである。全力で走っているのなら話は別だが、ふたりは10分という時間を考え少し力を抜いて走っている。たかが5分で目に見えて差がでることはないはずだ。

「ええ、そうね。原因はいろいろあると思うけど・・・強いて挙げ  
るなら“障害物”の使い方、かな」

少し目を細め再度ふたりを観察する。

「“障害物”・・・？」

「あの専用フィールド、いろんな大きさの“障害物”って言うか、  
“柱”みたいなものが置いてあるでしょ」

わたしの言葉に頷く蘭。

「その使い方がうまいのよ、陽牙は」

「そんなもんでこんなに差がでるのか？」

「信じられないって顔してるわね。でも、“そんなもん”よ」

一度言葉を切ったあと、それに、と続ける。

「使い方がうまいって、ただ単に蛇行してるとか、ぎりぎりですれ  
て相手がぶつかるように仕向けたりとか、そんなことだけじゃない  
のよ」

「他に何かあんのか？」

「そうね、例えば・・・、あ、ほら」

そう言って、専用フィールドにいる陽牙たちの方を指差す。

「陽牙のやつ・・・なんで“柱”の上に乗ってるんだ？」

蘭が不思議そうに言う。その視線の先には、楽しそうに“障害物  
”の上に立つ陽牙がいた。

「さっきから結構やってるわよ。気付かなかった？上ったり降りた

り・・・そりゃあ夏美もばてるわよ」

「ちよくちよく視界から消えるとは思ってたけど・・・」

全然気付かなかった、と少し悔しそうに言う蘭。

「まあ、原因はこれだけじゃないと思うけどね」

「そうだな、なんかあんまりすごい感じしないよな」

うーん、陽牙が聞いたら落ち込みそうな台詞だわ。

確かに聞くだけではすごい感じはしないが、あれをやるには相当の運動量を伴うはずだ。生半可な体力では先に自分がばててしまうだろう。

「それにね、鬼は時間がなくなってくるとどうしても焦るのよ。今

回のゲームは人間の方が有利ね」

「じゃあさ、陽牙が鬼だったらどうなってたと思う？」

「絶対に勝ってたわ」

自分の言葉に、信頼というより確信に近い響きを感じる。

「なんで言い切れるんだ？」

「いくら夏美の運動神経がよくても、専門は爆撃。対して陽牙の専門は陽動。つまり人を誘導して自分のやりたいように動かせるのよ。さつきは人間の方が有利なんて言っただけ、ゲームが“鬼ごっこ”だった時点で陽牙の勝ちが決まったようなものだったのよ」

一息に言い切って、またふたりの方を見る。夏美の息はさつきよりも荒くなっている。

「そっいえば・・・あたし陽牙を捕まえたことないや」

蘭は記憶を探るように少し眉をひそめ、妙に納得したように呟いた。と、そのとき、観客たちがカウントダウンを始めた。

「10.....9.....」

その声を聞いた夏美が焦ったようにスピードを上げた。陽牙との距離が縮まる。

陽牙は少し驚いたような顔をした後

「へえ、意外とやるじゃん」と、楽しそうに言った。

「8.....7.....6.....」

カウントダウンが続いていく中、夏美はラストスパートだと言うようにどんどんスピードを上げていく。それにしただって縮まる距離に、笑みをこぼしている。

「5.....4.....」

もう、すぐ後ろまで近づいている夏美を見ても、陽牙は余裕の笑みを浮かべている。

「3.....2.....」

“ゼロ”が近づいていくと、比例するように観客たちのテンションが上がっていき、自然と声も大きくなってくる。夏美の手が陽牙に向かって伸びていく。

「1.....」

みんなが「1」カウントをしたそのとき、夏美がいきなり防御の体勢をとった。

次の瞬間、陽牙がわたしたちの視界から

消えた。

## 第十二話（後書き）

なんとなくしよぼい陽牙・・・

せっかくの見せ場のなのにw次回はちょっとかつこいいかもです・

・

この間初めて感想をいただきました。思っていたよりもずっと嬉しくてびっくりしました。テンションあがってしまいますよw

読んでくださってありがとうございます

感想などいただけると嬉しいです



## 第十三話

陽牙の姿が、わたしたちの視界から消えた。

いや、陽牙を捜したが見つからなかった、と言ったほうが正しいだろう。

ピーッ！

終了のブザーが鳴り、観客も一瞬にして静まりかえる。防御の体勢をとった夏美はそのまま固まっている。わたしも含め、この場に  
いる全員が夏美たちのいるフィールドを見つめ、突然消えた陽牙の姿を探す。

そんな静寂をぶち壊すように、特有の間延びした声と共に陽牙が姿を現した。

「びつくりした〜？」

へへっ、と悪戯の成功した子どものように無邪気に笑う陽牙。楽しそうに首を傾げながら、さっきまで隠れていた柱のような障害物にもたれかかる。

「あ、え？ な、なんで・・・」

夏美はまだショックから立ち直れていないようで、かるうじて防御の体勢は解いていたが、陽牙を見て呆然と立ち尽くしている。

「実力の差だよ」

あっさりと言ったのける陽牙。そう言ってしまっただけにもならないだろう。

「結果は見てのとおりだ。勝者、陽牙！」

理事長の声に、また観客が歓声をあげる。陽牙のファンも混じっているのだろう。さっきよりも黄色い声が目立っている。

「ふいふ、疲れた」

専用フィールドから戻ってきた陽牙は、全然疲れてはいなくせにそんなことを言った。

「どうだった？俺の勇姿」

陽牙はくりと向きを変えて蘭の方を向き、「冗談のように尋ねた。いや、どうせ褒めてはもらえないと思っていろいろ、完全に冗談で尋ねていた。

「おう、かつこよかったぞ！」

そんな陽牙の予想を、蘭は爽やかな笑顔と共に見事に裏切った。陽牙は虚を突かれたように一瞬目を見開き、口を少し開いたかと思うと見る見る頬が赤く染まった。

「どうしたんだ？」

それを見た蘭は、氣遣わしげな声色で陽牙に声をかけた。

「っ・・・あーもう！」

陽牙は乱暴に頭を掻き、少し怒ったように言った。そして、きよ  
んとしている蘭を抱きしめた。

「!!!??」

びつくりしている蘭に対し、観客からは複数の甲高い悲鳴が上がる。おそらく陽牙のファンだろうが・・・また蘭が恨まれることは間違いなさそうだ。

「な、なにしてんだよ」

「いやゝ、なんかもう耐えられなかったっていうかねゝ」

蘭がジタバタともがく。すると陽牙は、意外にもあっさりと蘭を開放した。

「お？あ、ああ」

あれ？というように軽く首を傾げる蘭。そんな蘭を見て楽しそうに笑う陽牙。

「ん？不満だったゝ？」

「なっ!?!んな訳あるか！」

「ははっ、冗談だつてばゝ」

陽牙は満足気に微笑むと、殺翁の方へ行き何か楽しそうに話始めた。一方蘭は、少し不満そうな顔をしていた。おそらく無意識なの

だろう。じつ、と考え事をするように陽牙の方を見ていた蘭だが、しょんぼりとしながら近づいて来る夏美を見つけると、走り寄って慰めはじめた。

そこでもうちよつと押せば進展するだろうに・・・もったいないなあ。

「才花っ！何ぼーっとしてんの？」

いつの間に来たのか、陽牙にぽんと肩を叩かれる。

「ちよつとね・・・」

そのご機嫌な顔をみた瞬間思わずため息がこぼれる。

わたしのところに来てる暇あったら蘭としゃべればいいのに・・・。

「ええゝ何？人の顔見てため息つかないでよ」

「・・・なんでもないわ。それより、さっきは一体何が起こったのよ」

「さっきって？」

「さっきの“鬼ごっこ”の最後よ。夏美に何かしたの？」

わたしの言葉を聞いて、ああ、あれねゝ、と頷く陽牙。

「たいしたことしてないよ。ただ逃げるのをやめただけ」

「・・・どうゆうこと？」

顎に手をあて考えるポーズをとる陽牙。・・・陽牙がやるとわざとらしく感じるのは何故だろう。普段の行いの悪さか。

「んんゝそうだなあ・・・例えばさ、才花が走つてるときにいきなり前に居た人が立ち止まったら、どうする？」

「どうするって・・・止まるか避けるかするに決まって・・・ああ！」

さっきの夏美の行動を思い出す。

「かなりのスピードで走っていた夏美には、いきなり立ち止まった陽牙がこっちに向かってきたように見えたのね」

夏美はいきなり向かってきた相手に対して反射的に防御してしまったのだろつ。

「そうゆうことゝ。普通のひとだったら勢いのまま俺にぶつかつちやうだろつけど・・・」

「夏美は反射神経が良すぎた・・・」

普通の人だったら反応できないような突然の衝撃にも反応できる鋭い反射神経が、逆に作用してしまったようだ。

「せいかしい。流石才花だね」

陽牙に褒められた。

・・・馬鹿にされてる気がしてあまり嬉しくない。

「・・・才花って意外と分かりやすいよね」

どうやら考えていることがばれたらしい。ため息を吐かれた。うるさいわね。

「・・・それにしても、仕組みが分かっちゃうと案外簡単だったわ

ね  
「

何か言つのも癪なので別の話を振る。

「手品なんてそんなもんだよ」

陽牙は少し呆れ顔だったが、諦めたのか少し笑って答えた。

・・・陽牙ってなんだかんだで優しいし、やっぱりかっこいいわよね。

惚れることはないけど。

### 第十三話（後書き）

陽牙はいい奴だけどいい奴どまりな子ですね

そして人の恋には敏感なくせに自分の恋愛となると鈍いですw  
このふたりはくつつくことができるのか・・・

感想などいただけると嬉しいです！

## 第十四話

「ほら才花、次のゲーム始まるよ」

今度は頭を叩かれる。陽牙はわたしよりはるかに背が高い。確かに175cmは軽くあつたはずだ。わたしは150cm後半。身長に關しては今まで困ったことがないので気にしてはいないが。

「次で最後ね。誰が戦うの？」

「冬弥と蘭みたいだね」

陽牙がステージの方を指しながら言った。蘭がこっちに手を振っているのが見える。

「じゃあわたしはゲームに参加できないのね・・・」

「いや、そうでもないみたいだよ」

理事長の説明が始まる。

「次のゲームは“クイズ”だ。だが今回のゲームは二人一組で行ってもらう。まだゲームに参加していない者とペアを組むように」

ステージ上の冬弥と自然に目が合う。どちらともなく笑みがこぼれた。

「楽しみだわ。・・・そういえば、なんで陽牙分かったのよ」

まだ理事長の説明は始まってなかったのに。



「なんとなく？」

いつもの笑顔で陽牙が言った。・・・陽牙ってつくづく食えない奴。

「才花！」

ステージの上で蘭が呼んでいる。春貴はすでにステージの上に立っており、残りはわたしだけのようだ。少し急いでステージに上がる。

「ごめんね、ちょっと陽牙と話してて」

「それは別にいいんだけど・・・あのさ、陽牙って」

「才花ちゃん！久しぶり」

蘭が何か言いかけたところに春貴が乱入してきた。タイミングが悪いのよ、まったく。珍しく蘭が陽牙のこと言いそうだったのに。

「蘭？陽牙がどうかした？」

「あ、いや、なんでもない」

まだ何か言いたそうな顔をしているが、この様子ではこれ以上聞いても教えてくれないだろう。

「そう？ならいいけど」

ちっ、進展しそうな予感だったのに・・・。

「才花ちゃん、無視しないでよ」

「うっさいわね。何が“ひさしぶり”よ。朝にも会ったじゃない」

「ちゃんと聞いてくれたんじゃない。嬉しいな」

本当に嬉しそうに、しかしへらへらと笑う春貴。

「てかさ、まじで久しぶりだから！勝負中全然しゃべれなかったし、近くに居るのにしゃべれないもどかしさを味わってたよ、俺は！」

「全然久しくないから。そういうのはせめて一週間以上会わなかったら言つてよ。学校で普通に見かけるでしょ」

「才花ちゃんは男心が分かってないなあ、好きな子見かけたらしゃべりたいもんなんだよ。ましてや他の男としゃべってたりなんかしたら、気になってしょうがないんだって」

駄目だなあ、というように頭を横に振る春貴。何かむかつくんだけど。

「男心はどうか知らないけど、とりあえず春貴の考えてることは全然分らないわ」

「才花ちゃんってスルーの天才だと思うよ」

「・・・どこがよ」

「ふたりとも静かにしろって」

蘭に止められる。

「ああもう、春貴のせいで・・・」

「俺のせい！？」

「いや、普通にそうでしょ」

「君たちには緊張という概念がないのか？」

ため息混じりに冬弥が言う。

「冬弥だつて緊張なんかしてないくせに」

「絶対そうよね」

「そんなことないよ」

につこりと笑うところが逆に怪しい。

「ほらほら、静かにしないと」

冬弥がそう言ったのをきっかけに黙る。というか、わたしたちはきっかけがないと黙れないのだろうか。もはや口喧嘩がパターン化しているな・・・。

理事長が説明を始める。

「今回のゲームは、一人に棒を登ってもらい上まで達してボタンを押すともうひとりに解答権が与えられる。なお、棒を登るときのお互いへの妨害工作は有りだ。チームメイトが助言するのも許されるが、手助けをしてはならない。あくまでアドバイスまでだ。では、クイズの解答者と棒を登る者を決めなさい」

これは迷うまでもないことである。クイズの解答者になったわたしと冬弥はステージ上の椅子に座り、蘭と春貴はさつき陽牙たちが使っていた専用フィールドの隣ある、15m程の棒が何本も立ち並ぶフィールドに移動した。わたしたちの座った椅子の前には教室で使われるような机があり、それぞれ小さなモニターが置かれている。一方蘭と春貴はフィールド内をゆっくりと歩き回っている。棒の太さや形が少しずつ違うため、二人ともどれに登るか悩んでいるようだ。悩んだ末蘭は、少しねじれていて軽い螺旋状になっている棒にした。春貴は何の変哲もない真っすぐな棒を選んだ。

「では、最終ゲーム、始め！」

観客の興奮した声が聞こえ、春貴と蘭が同時に棒に登りだした。

## 第十四話（後書き）

今回会話文多いですね・・・

本文若干修正いたしました、そんなに問題はないと思います（多分

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3345v/>

---

S A S

2011年11月11日10時49分発行